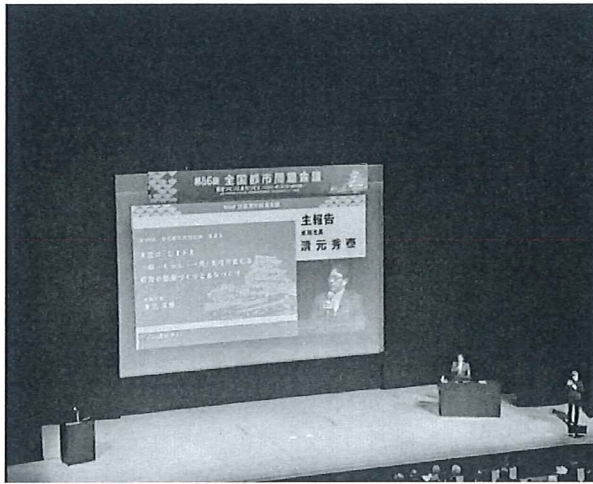


研修活動実績報告書

2024年 10 月 25 日

会 派 名 又 は 議 員 名	フォーラム新桑名	会 派 代 表 者 印 又 は 議 員 印	
年 月 日	2024年10月17日(木)～2024年10月18日 (金)		
時 間	17日9時30分～・ 18日9時30～		
参 加 者 氏 名	愛敬重之		
場 所 (調 査 先)	姫路市 アクリエひめじ		
調査・研修先説明者	目次参照		
目 的 ・ 内 容	第86回全国都市問題会議 健康づくりとまちづくり～市民の一生に寄り添う都市政策～		
成 果・所 感			
基調講演 生命を捉えなおすー動的平衡の視点からー 生物学者 青山学院大学教授 福岡伸一  生命の問題を考えると、機械論的生命観と思っていたが、ルドルフ・シェーンハイマー科学者が機械論とは違う、もうひとつの画期的な生命観を唱えた。私たちが食べた分子は、身体を構成する分子と絶え間なく交換されつづけている。つまり、私たち生命とは、部品からなりたっている分子機械ではなく、部品自体のダイナミックな分解と合成の流れの中にたゆたう「分子の淀み」である。自らを積極的に壊しつづけることによって、系内たまるエントロピー(乱雑、無秩序さ)を捨てつづけ、またそれを作り直すことでなんとかバランスを保つ。それが生命体の特性。シェーンハイマーの思考を発展させ、福岡氏は「動的平衡」と呼んだ。 まちづくりの観点からも、予防保全をしながら、先回りし、エントロピーを増大させる前に補修や修繕をしていくというところなど、生物に学ぶところかと感じた。			



主報告 市民の「LIFE」(命・くらし・一生)を守り支える姫路の健康づくりとまちづくり 姫路市長 清元秀泰

姫路市では市民の「LIFE」(「命」「くらし」「一生」)を守り支えることを市政の基本方針としており、市民の健康増進に向けた施策を積極的に展開している。

健康づくりに資する市の取り組み

(1)市民による主体的な介護予防を促進

①軽度認知障害(MCI^①)等の予防支援

②生活習慣の改善ならびに各種疾病の早

期発見および重症化予防

(2)ウォーカブルなまちづくり

①公共空間の利活用、歩行者利便増進道路「ほこみち」

②Himeji大手前通りイルミネーション

(3)ICTを活用した健康づくり

①マイナンバーカードを活用した救急業務の迅速化・円滑化

②「ひめじポイント」を活用した健康づくりの促進

(4)未来を担う子どもたちの健やかな成長を支援

①こどもの未来健康支援センター「みらいえ」の開設

②子育て情報の発信

●人口減少・少子高齢化が進む困難な時代において、市民の「LIFE」を守り、まちに活力を生み、明るい未来を切り拓いていくための原動力は、「人」であり、健康は、人づくりの根幹をなすものであると考えている。市民の健康づくりを促進するためには、市民の健康状態を把握し、改善・自立を促すだけでなく、市民自らが健康増進に資する活動へ積極的に参画するとともに、日々の生活を送る中で自然と健康になれるような社会環境を構築していくことが重要であると感じる。

一般報告 生き物から学ぶ健康なまちづくり

筑波大学システム情報系教授 谷口 守



「健康まちづくり」の考え方が、近年大きく着目されるようになってきました。高度成長期以降、都市は利便性を追い求め、生活水準をどう向上させるかに政策の焦点が置かれてきました。確かに便利な世の中にはなりましたが、その反面運動不足などに伴う市民の生活習慣病は大きな課題。

興味深いことに、市民の健康と都市の健康は様々な面で密接に関係しているのです。私自身は、人口減少に直面してもメタ

ボ体系から抜け出そうとしない都市をどうコンパクト化していくのか、そのための分析と制度

づくり、普及啓発と合意形成に長年取り組んできました。その過程で、都市も市民も同時に健康となるためには、まちづくりのあり方自体について、生き物から学ぶという姿勢が極めて有効である。

●市民の健康づくりにおけるまちづくりの重要性

日常の移動を自動車に依存する都市では人は歩かなくなりましたが、そのような都市は、その形状自体がメタボ(コンパクトではない)なのです。シンプルなことですが、都市を健全にダイエットすることが、実は市民の健全なダイエットにもつながる。

●都市は病気？

都市の「生活習慣病」に関連するようなトピックスを紹介

1. 循環不全

現在の日本の都市計画や交通計画は各市町村が責任をもって計画する仕組みになっており、その結果各市町村は自分の行政区域の中だけを見て最適な計画を作成してしまう。各市町村が作成した都市マスタープランの将来構想図を切りだして張り合わせると、相互に関連性のないモザイク図ができあがります。健康体を支えるはずの血管ネットワークが計画の段階において各所で不整合を起こしてしまっていることが分かる。

2. 肥満

公共交通と歩ける範囲でコンパクトに展開するというのがこれからの健康まちづくりの基本

3. 骨粗しょう症

まちの中でも気づかないうちに空き家が増え、中がスカスカになっていくと困ったことが起こります。都市サービスを受ける側の人が増えるため、今まで提供されていた路線バスやコンビニが撤退するなどといったことがいきなり発生することになります。必要なサービスが受けられない「寝たきり都市」にならないよう、普段の対策が必要。

4. がん

周辺エリア全体が緩やかに人口減少する中で、そこだけがピンポイントで肥大するメカニズムで動いている、というのはまさにがんのような存在です。都心に超高層ビルが建っていると望ましいコンパクトな都市のように錯覚してしまいがちですが、見た目だけでは健康かどうかは、判断できない。

●人口減少が進む中で健康なまちづくりを進めるには、現在当たり前のようには考えられている競争して儲けることが正しいという考え方から離れてみる必要があります。周囲と協調しながら都市構造の体質改善をはかっていくこと、そのことこそが現在の各市町村に求められている健康まちづくりの本質。

一般報告 都市そのものを健康にするまちづくり～ストレスを軽減し、リフレッシュできるまちへ～

千葉県流山市長 井崎義治

政策分野において「健康」を考慮した政策を形成し、推進することで、都市生活における市民のストレスを軽減し、リフレッシュできる環境を創ること。その後、流山市健康都市プロ



グラムを策定し、健康にかかわる事業を5つの分野に分け、健康都市施策を展開していました。

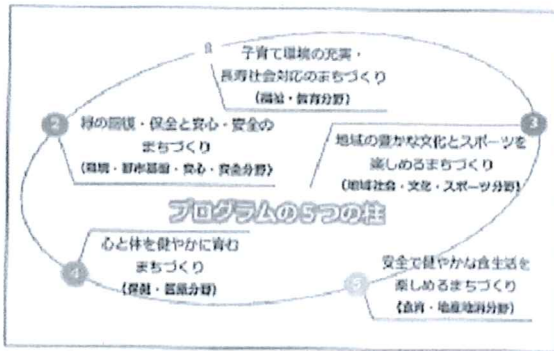


図1 「流山市健康都市プログラム」 5つの柱

取り組みでの代表例としては2点ありました。

「駅前送迎保育ステーション」

「グリーンチェーン戦略及び認定制度」

●つくばエクスプレス沿線区画整備事業で失う緑を回復する方策はないか

エクスプレス沿線区画整備事業のため伐採が始まり、失われた緑をどのように回復させるかが大きな課題のようです。

●環境価値・景観価値を高める「グリーンチェーン制度と認定制度」

グリーンチェーン制度については、H18年に開始。認定を受けた住宅や集合住宅は広告に認定マークを利用できるようにし、市内の金融機関からはグリーンチェーン認定物件の購入者に優遇金利での貸し付けの協力を取り付けました。また認定基準として沿道の植樹・植栽の本数や植樹時の高さを規定し、認定物件の環境価値が確実に高まるように規定しました。

また、グリーンチェーン認定の住宅からの剪定枝については、堆肥化を行う市のエコセンターで、無料で、引き取る対応も実施している。実績については、R6年3月時点で、8,225戸に達している。緑豊かなやすらぎを感じるまちづくりは、ストレスを軽減し、リフレッシュできる健康都市となっています。

IT/AIの健康分野への適用例～姫路市の健診データ解析と歌唱による誤嚥予防～
兵庫県立大学副学長 畑 豊



姫路市は大学との市民の健康に関して連携強化もこの報告を伺いよく理解しました。

ITを利用し市民の健康診断を数値化し、見えるかを図っている。

ファジィ理論による健診データ評価は、姫路市医師会とも連携し、ABCDと4つの判定区分として分かりやすくなっている。

その結果、男性は糖尿病になるリスクが女性より高い。女性のLDLは男性よりも悪いことを示した。このようにファジィ値は地域の健康特性を表すことができる。また都市間、地域間の特性の違いを分析するのにも有効であることが分かりました。

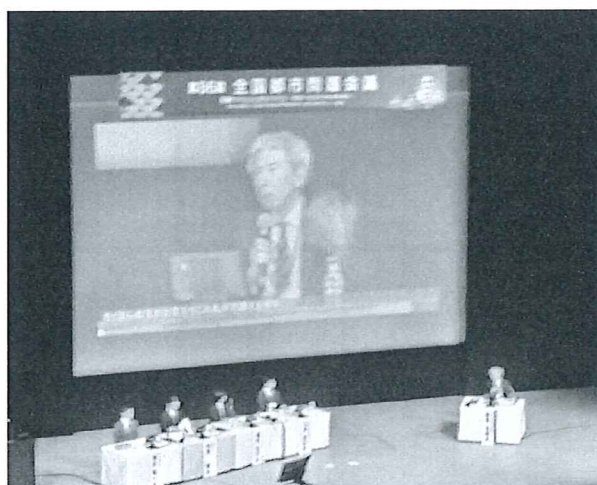
●AIによる嚥下解析とその歌唱による誤嚥への挑戦

今回、増加傾向にある誤嚥性肺炎についてAIを用いての報告であった。統計解析結果はRSSTにおいて歌唱者は非歌唱者より統計的に優位であり、歌唱が嚥下機能向上に効果的であることが分かりました。

パネルディスカッション

健康づくりによるまちづくり

コーディネーター: 中央大学法学部教授 宮本太郎



元気人口を増やしていくことが課題。元気人口を増やすとは何をすることか。4つのポイントをあげておりました。

(1) 病気? 健康? 中間ゾーンの膨らみ

(2) ライフサイクルを通してのケア

(3) ポピュレーション・アプローチと「場」づくり。

(4) デジタルも活用した医療・ケア連携

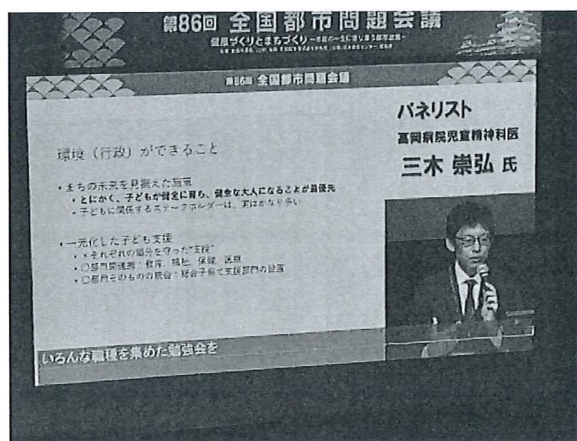
地域における健康づくりはこれまで取り組まれてきた領域を大きく超えて、まちづくりそのものと重なってきていることが分

かります。両若男女を問わず「元気人口」を増やすならば、自治体の持続可能性も高まります。しかも、健康問題は市民誰もが当事者で、誰もが関心を高めうるテーマです。そして市民1人1人が主体にならなければ前にすすまないテーマでもある。市民がまちの将来、働き方やライフスタイルを見直していくきっかけにもなります。

課題意識をもってパネルディスカッションの議論を深めたい。

パネリスト

心理社会面から見た子どもの健康 高岡病院児童精神科医、三木崇弘



「子どもは、未来の大人」をしっかりと考えないといけない。しかし、残念なことに、その子どもたちが、いま、とてもしんどくなっているように思える。

健康という文脈で「身体的健康」の次にフォーカスしていくべきは「人の関係性や暮らし」における「心理行動面の問題」の3点ではないでしょうか。

●不健康な子どもたち

現代社会において子どもたちは不健康に

なっているような感じです。

●まち、コミュニティ、人

●コミュニティ(ソフトのソフト)を作るための、行政(ソフトのハード)

つどいの場や安心感づくりは、簡単にできることではない。しかし、例えば「子育て支援が充実している自治体」というイメージは、1つの安心感の提供になります。「イメージそのもの」が住民の安心感に影響していると思います。これらはつまるところ制度の問題であり、人々は制度を通じて安心感を得ている。

食を切り口とした1人1人の望む暮らしを支援する

栄養パトロール事業

NPO法人日本栄養パトネット理事長 奥村圭子



●誰も取り残さない食の支援「栄養パトロール」

3つのポイント

1. 食べられない原因の地域問題の早期発見と多職種連携

・各市町村の根拠ある食環境問題の早期発見し適材適所につなげる

2. 個人の栄養問題の介入(生活習慣病・フレイル・低栄養予防)

・食環境問題から個人の健康問題を根拠に基づき評価

・管理栄養士が介入し、多職種に繋げ医療費削減に貢献

・無関心者に予防的支援が可能

・SOSうい出せない・出たくない・出す方法が分からない人に対応可能

3. 食べられない問題解決のための既存の社会資源の再開発

・孤食や買物難民、生活困窮など栄養障害の社会問題を見える化

・栄養障害の社会問題解決のための既存の社会資源の再開発

未来型「ゆい」で紡ぐ健康高原都市・茅野の構築

長野県茅野市長 今井 敦

●「健康」を軸にした未来型「ゆい」の創造

この地域に古くから息づいてきた、地縁や血縁などにもとづく、多くの人の手による支え合い、助け合いの「結」に焦点を当てたそうです。

必要な3つの要素として

「人の健康」「社会インフラの健康」「データの健康」を掲げ、さらにこの3つの健康による未来型「ゆい」の創造が、持続可能性や柔軟性、強靱性等を備えた「まちの健康」の実現にもつながるといった考え方をベースとし、最終的に、それぞれの健康に寄与する14の取り組みを盛り込んだ提案書を国に提出した。その結果「デジタル田園健康特区」に認定。

●「社会インフラの健康」が実現する「まちの健康」

社会インフラが健康な状態であることは、人の不安やストレスを取り除き、「人の健康」に寄与します。また、好きな時に好きな場所に行くことができる、ストレスフリーな公共交通の仕組みが整備されることにより、「人の健康」の向上も図られる。さらに、健康な人が市内を自由に行き来し、そこで人と交流したり、買い物や食事などをしたりすることにより、地域のコミュニティや経済が活性化し、「まちの健康」にもつながることが期待される。

「公共交通」に注目したようです。

茅野市でも桑名市と同様で、公共交通特に電車とバスの乗り継ぎや停留所も問題で使い勝手が悪い状況でした。

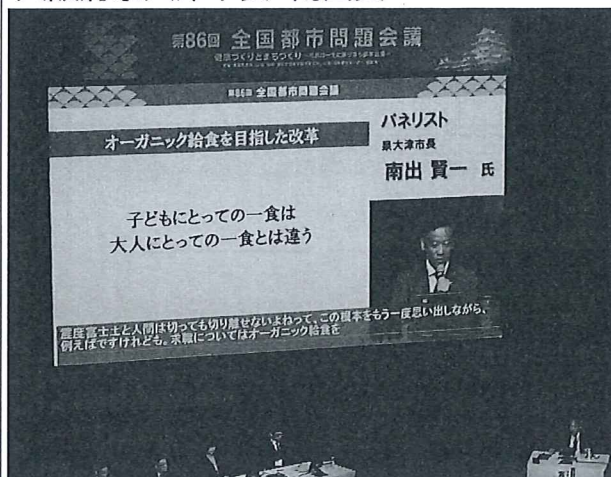
変更点:JR駅方面に通勤・通学バスを6路線。電車の発着時刻に合わせ変更。

変更点2:日中の病院通いや買物に行く人らの移動を支えるために、予約制のAI乗合オンデマンドバス交通「ならざあ」を導入。

能登半島で大きな地震災害があり、改めて市民力・地域力・行政力は重要であると痛感している。新しい時代に対応した未来型「ゆい」の創造が重要。

「未病予防対策推進都市」をめざした「官民連携」「市民共創」のまちづくり

大阪府泉大津市長 南出賢一



●「未病予防対策先進都市」をめざして(泉大津市健康づくり推進条例の制定)

泉大津市健康づくり推進条例の制定では市の責務として4つを中心に取り組んでいる。

「健康状態の見える化」

「学びの場の充実」

「食育の推進」

「多様な選択肢の提供」

今回の市長のお話を伺い、「食の推進」を

ポイントに記載したい。

「医食同源・身土不二」という言葉にもあるように、食べることは生きることであり、「食」は健康づくりにおいて大変重要です。子どもの1食は大人のそれよりも重要であるとの考えのもと、小中学校の給食の米については、有機米や特別栽培米を金芽米加工(ビタミンBや食物繊維等、白米には少ない栄養素を多く残す精米方法)して提供。また、発酵食品やオーガニック食材、旬やミネラル豊富な食材等を使った特別な食品「ときめき給食」を毎月2回提供。塩は自然塩を使用し、マーガリンやショートニングを使ったものは提供しないなど、食育に力を入れている。それだけではなく、妊婦とおなかの赤ちゃんの健康を「食」でサポートするため、金芽米を毎月最大10kg無償で提供する「マタニティ応援プロジェクト」や、学童・思春期・青壮年期・高齢期を対象にした料理教室を実施するなどあらゆる世代を対象に食育の取り組みをおこなっている。お米もこだわりがあり、官民連携で滋賀県の農家さんと直接、お米の買い付けをおこなっており、素晴らしい事だと感じました。

以上

(注)成果・所感は別途報告様式に替えることができる。